

## 都道府県別「転出表」：昭和45年

伊 藤 達 也

### 1 「転出表」とは何か

「転出表」は、生命表理論を地域移動現象に拡大適用した表の1種である。一般に生命表は、一定期間におけるある人口の死亡状況が今後一定としたとき、その期間に発生した人口集団が、年々どのように死亡減少していくのか、また各年齢であと何年生存できるかといったことを、死亡率、生存数、平均余命等の生命表関数を用いて表わしたものである。実際の人口は、死亡のほかには他地域との転出によって減少し、出生と転入によって増加する。そこで、ある人口が死亡状況だけでなく、転出や転入の状況までも考慮に入れた時、その期間内に発生した人口集団が、年々どのように死亡あるいは転入や転出によって変化していくのかを生命表形式で表現されたものをここでは「移動表」といい、また、全国をいくつかの地域に区分し、それぞれの地域の死亡状況と、地域間移動を同時に考慮した生命表を「多地域（連結）生命表」ということにしよう。「転出表」は、「移動表」の1つで、人々がある地域において死亡や転出の危険にさらされながらどのように居住していくのかを転出率や未転出余命などによって表わしたものである。

「移動表」あるいは「転出表」を作成する意図は次の2点にある。第1は人口分析法における理論的意図である。これまでの人口分析の中心テーマは、出生と死亡で、地域人口の変動要因の1つである移動は「人口再生産の混乱要因」として考えられてきた。しかし、わが国のように地域間人口移動の規模で大きい場合、地域の人口構成および人口分布に与える影響は大きい。このような場合、移動の人口学的分析の水準も出生や死亡と同じレベルで考え、理論的に検討しなければならない。

「移動表」あるいは「転出表」を作成する第2の理由は、実際上の必要性である。最近、都道府県あるいは市区町村単位の男女・年齢別人口の将来推計に対する要望は強まっている。これまで都道府県別人口の将来推計は、総人口のみが公表されることが多く、年齢別人口まで計算し公表された結果は多くない。しかし、都道府県別男女年齢別人口を将来推計をおこなうにあたって、将来時点の男女年齢別の地域間人口移動率が、出生率や死亡率と同様に、必要である。将来時点の移動率を想定するには、まず過去から現在までの移動率を計算し、その動きが男女、年齢、地域によってどのようなパターンを示しているのか、またそのパターンが社会経済的条件とどのような関係にあるのか、を分析しておく必要があろう。

以上の目的と理由から、昭和45年の国勢結果から得られる、昭和44年10月から45年9月までの1年間の人口移動集計をもとに、昭和45年の都道府県別「転出表」を計算した<sup>1)</sup>。今後機会があれば、昭和35年あるいは50年、55年の人口移動集計を基に、移動率ないし「転出表」を作成し、地域間人口移

1) 伊藤達也、「地域別・男女年齢別将来人口推計の一方法：1970年国勢調査に基づく転出表とその応用」、『人口問題研究』、第155号、1980年 pp. 47～70。

動パターンの検出を試みたい。

次に今回作成した「転出表」が、これまで作成されている「転出表」あるいは「移動表」とどのような関連にあるのかを、みておこう。わが国で、人口移動率を構成要素の1つとした「移動表」あるいは「転出表」には、小林の「死亡・純移動複合表」(1981)<sup>2)</sup>と、黒田、岡崎、南条、鈴木、大塚の「多地域生命表」(1980)<sup>3)</sup>がある。小林の「死亡・純移動複合表」は、京都市という1つの地域について、年齢別の死亡率と純移動率の2つの確率から構成されたものである。これに対して黒田らの「多地域生命表」は、全国をいくつかの地域に分割し、地域ごとの死亡率および地域間移動率によって構成されている。前者の「死亡・純移動複合表」が、個別地域の分析と将来推計をおこなうための表であるのに対して、後者の「多地域生命表」は、全国人口の分布変動の過程および移動が地域人口の年齢構成にどのような影響を与えるのかを明らかにするための表である。

「転出表」も「移動マトリックス表」<sup>4)</sup>とセットにすると、「多地域生命表」と同様なことが明らかにできると考えている。そこで次に、「多地域生命表」と「転出表」+「移動マトリックス表」との関係についてふれておこう。「転出表」および「移動マトリックス表」の考え方と作成方法は、すでにのべているが、ここで簡単にその内容を示しておきたい<sup>4)</sup>。「転出表」は、各地域の年齢別死亡率および県外転出率から構成されている。また「移動マトリックス表」は、ある地域から他地域へ転出人の総数を1.0とし、各地域への転入する割合  $m(i, j)$  を、男女年齢別に示したものである。いいかえると、まずはじめに、ある地域に居住する年齢  $x$  歳の人口は、「転出表」によって死亡する人、他地域に転出する人、および未転出残存者とに分けられる。次に他地域に転出する人口は、「移動マトリックス表」によってそれぞれの地域に転入していくことになる。各地域ごとに、他地域からの転入者総数と、他地域への転出者総数との差が、純移動者数となる。また、未転出残存者数と転入者数を加えると、1年後あるいは5年後のその地域の人口となる。

このように2段階に分ける考えを、1つにまとめて表わしているのが、ロジャースの「多地域生命表」である。全国を地域に分け、それぞれの地域の男女年齢別人口を将来推計する方法として、両者に大きな差はない。しかし、「転出表」と「移動マトリックス表」を用いる方法は地域人口の将来推計を計算するために考えられているのに対して、「多地域生命表」はある期間の死亡率、移動率に出生率を構成要素として、地域人口の各変動要因から、人口学的“多地域安定人口”をも表現しようとしている。

現在のところ、ロジャースの「多地域生命表」を用いて地域人口の将来推計をする計算プログラムは、単性のモデルしか用意されていない。ここでいう単性モデルとは、人口、出生率、死亡率、移動率が1つの性に関するモデルということで、たとえば女子のみあるいは男子のみに関するデータによる計算、あるいは男女こみで計算することしかできないということである<sup>5)</sup>。「転出表」と「移動マトリックス表」によって将来推計の計算をおこなう場合は、こうした制約はない。

## 2 方法と資料

「転出表」作成の方法と計算に用いた資料は、すでに「地域別・男女年齢別将来人口推計の一方法

2) 小林和正, 「死亡・純移動複合表」, 『人口学研究』, 第4号, 1981年, pp. 17~22.

3) 黒田俊夫・岡崎陽一・南条善治・鈴木啓祐・大塚友美, 「ロジャースモデルとその日本人口への適用」, 『日本統計学会誌』第10巻, 第1号, 1980年, pp. 73~83.

4) 伊藤達也, 前掲(注1), pp. 58参照.

5) 南条善治教授によれば, 最近この制約をなくすプログラムが開発されつつあるとのことである.

表1 転出表 (生命表)

(1) 東京都(男)

年齢階級 歳 歳 $x \sim x+4$	死亡 率		転 出 率		生存数	死亡/転出数		5年間に発生する 死亡/転出数	
	中 央 死 亡 率	死亡確率	中 央 転 出 率	転出確率		$l_x$ に対する 死亡数	$l_x$ に対する 転出数	${}_5L_x$ に対する 死亡数	${}_5L_x$ に対する 転出数
$x$	(1) ${}_5m_x^d$	(2) ${}_5q_x^d$	(3) ${}_5m_x^e$	(4) ${}_5q_x^e$	(5) $e_x$	(6) ${}_5d_x^e$	(7) ${}_5d_x^e$	(8) $D_x$	(9) $E_x$
出 生	—	—	—	—	—	—	—	2,997 <sup>1)</sup>	72,447 <sup>2)</sup>
0 ~ 4	0.002598	0.012904	0.073914	0.311930	100,000	1,290	31,193	3,673	118,003
5 ~ 9	0.000343	0.001713	0.046206	0.207106	67,517	116	13,983	469	54,138
10 ~ 14	0.000267	0.001333	0.030596	0.142110	53,418	71	7,591	508	38,375
15 ~ 19	0.000585	0.002920	0.037654	0.172072	45,755	134	7,873	644	52,299
20 ~ 24	0.000657	0.003280	0.083355	0.344902	37,749	124	13,020	551	60,971
25 ~ 29	0.000782	0.003900	0.119413	0.459800	24,605	96	11,313	421	41,291
30 ~ 34	0.001098	0.005473	0.097299	0.391310	13,196	72	5,164	358	19,252
35 ~ 39	0.001591	0.007923	0.054105	0.264474	7,960	63	2,105	327	7,944
40 ~ 44	0.002649	0.013157	0.0	0.221222	5,792	76	1,281	416	5,156
45 ~ 49	0.004269	0.021118	0.036657	0.186105	4,434	94	825	477	3,384
50 ~ 54	0.005820	0.028683	0.0	0.157432	3,515	101	553	593	2,307
55 ~ 59	0.010023	0.048892	0.024716	0.133891	2,861	140	383	792	1,601
60 ~ 64	0.016193	0.077814	0.0	0.114462	2,338	182	268	1,029	1,115
65 ~ 69	0.026688	0.125093	0.017736	0.098345	1,889	236	186	1,342	767
70 ~ 74	0.046734	0.209225	0.0	0.084909	1,467	307	125	1,607	499
75 ~ 79	0.078418	0.327822	0.0	0.073654	1,035	339	76	1,583	289
80 ~ 84	0.125475	0.477568	0.0	0.064183	620	296	40	598	129
85 +	0.400000	1.000000	0.0	0.056176	284	250	34	1,134	152

年齢階級 歳 歳 $x \sim x+4$	静 止 人 口		平均余命	年 間 転 出 率 $\frac{(7)}{(10)}$	5年間の 転 出 率 $\frac{(9)}{(10)}$	5 年 後 の 未転出残存率 $\frac{{}_5L_{x+5}}{{}_5L_x}$
	年齢階級別 静 止 人 口	$x$ 歳以上の 静 止 人 口	平 均 未 転 出 余 命			
$x$	(10) ${}_5L_x$	(11) $T_x$	(12) $e_x$	(13) ${}_5e_x^{(1)}$	(14) ${}_5e_x$	(15) ${}_5S_x^e$
出 生	500,000 <sup>3)</sup>	—	—	—	0.144895 <sup>4)</sup>	0.849111 <sup>5)</sup>
0 ~ 4	424,556	1,630,579	16.31	0.073472	0.277944	0.713405
5 ~ 9	302,880	1,206,023	17.86	0.046167	0.178743	0.819708
10 ~ 14	248,273	903,143	16.91	0.030576	0.154568	0.843384
15 ~ 19	209,390	654,870	14.31	0.037601	0.249769	0.747153
20 ~ 24	156,446	445,480	11.80	0.083221	0.389724	0.606756
25 ~ 29	94,925	289,033	11.75	0.119184	0.434992	0.560568
30 ~ 34	53,212	194,109	14.71	0.097039	0.361808	0.631458
35 ~ 39	33,601	140,897	17.70	0.062653	0.236412	0.753866
40 ~ 44	25,331	107,296	18.53	0.050581	0.203541	0.780048
44 ~ 49	19,759	81,965	18.48	0.041764	0.171271	0.804569
50 ~ 54	15,898	62,206	17.70	0.034812	0.145127	0.817569
55 ~ 59	12,997	46,308	16.19	0.029473	0.123210	0.815853
60 ~ 64	10,604	33,311	14.25	0.025238	0.105178	0.797804
65 ~ 69	8,460	22,707	12.02	0.021954	0.090606	0.750791
70 ~ 74	6,352	14,247	9.71	0.019605	0.078622	0.668327
75 ~ 79	4,245	7,895	7.63	0.017962	0.068105	0.558970
80 ~ 84	2,373	3,650	5.89	0.016760	0.054253	0.542064
85 +	1,286	1,286	4.53	0.026153	0.0	0.0

: 1970年国勢調査に基づく転出表とその応用<sup>6)</sup> で明らかにしておいたのでここでは省略する。結果表の例として東京都の転出表(男, 女)を掲げておく。

6) 伊藤達也, 前掲(注1), 参照。

表1 転出表 (生命表)

(2) 東京都(女)

年齢階級 歳 歳 $x \sim x+4$	死亡率		転出率		生存数	死亡/転出数		5年間に発生する死亡/転出数	
	中央死亡率	死亡確率	中央転出率	転出確率		$l_x$ に対する死亡数	$l_x$ に対する転出数	${}_5L_x$ に対する死亡数	${}_5L_x$ に対する転出数
$x$	(1) ${}_5m_x^d$	(2) ${}_5q_x^d$	(3) ${}_5m_x^e$	(4) ${}_5q_x^e$	(5) $e_x$	(6) ${}_5d_x^d$	(7) ${}_5d_x^e$	(8) $D_x$	(9) $E_x$
出生	—	—	—	—	—	—	—	2,327 <sup>1)</sup>	72,834 <sup>2)</sup>
0 ~ 4	0.001982	0.009859	0.072964	0.308539	100,000	986	30,854	2,787	116,863
5 ~ 9	0.000268	0.001341	0.046971	0.210175	68,160	91	14,326	347	54,478
10 ~ 14	0.000174	0.000870	0.029505	0.137391	53,743	47	7,384	257	34,078
15 ~ 19	0.000242	0.001210	0.029017	0.135272	46,313	56	6,265	345	47,766
20 ~ 24	0.000411	0.002053	0.076807	0.322172	39,992	82	12,884	381	59,896
25 ~ 29	0.000518	0.002589	0.102779	0.408844	27,025	70	11,049	315	39,048
30 ~ 34	0.000705	0.003518	0.066721	0.285914	15,906	56	4,548	296	17,200
35 ~ 39	0.001006	0.005017	0.035902	0.175916	11,302	57	1,988	295	8,178
40 ~ 44	0.001472	0.007335	0.0	0.158001	9,257	68	1,463	406	6,375
45 ~ 49	0.002498	0.012414	0.026275	0.143890	7,727	96	1,112	533	4,896
50 ~ 54	0.003691	0.018288	0.0	0.132495	6,519	119	864	669	3,830
55 ~ 59	0.005520	0.027222	0.023309	0.123107	5,536	151	682	881	3,027
60 ~ 64	0.008922	0.043639	0.0	0.115244	4,704	205	542	1,253	2,399
65 ~ 69	0.015876	0.076348	0.022437	0.108566	3,957	302	430	1,785	1,874
70 ~ 74	0.028069	0.131143	0.0	0.102828	3,225	423	332	2,470	1,418
75 ~ 79	0.052757	0.233047	0.0	0.097849	2,470	576	242	3,011	979
80 ~ 84	0.097382	0.391579	0.0	0.093489	1,653	647	155	2,017	481
85 +	0.400000	1.000000	0.0	0.089643	351	687	164	3,236	773

年齢階級 歳 歳 $x \sim x+4$	静止人口		平均余命	年間転出率 (7) (10)	5年間の転出率 (9) (10)	5年後の未転出残存率 $\frac{{}_5L_{x+5}}{{}_5L_x}$
	$l_0=100,000$ とした時の人口集団	$x$ 歳以上の人口集団	平均未転出余命			
$x$	(10) ${}_5L_x$	(11) $T_x$	(12) $e_x$	(13) ${}_5e_x^{(1)}$	(14) ${}_5e_x$	(15) ${}_5S_x^e$
出生	500,000 <sup>3)</sup>	—	—	—	0.145667 <sup>4)</sup>	0.849678 <sup>5)</sup>
0 ~ 4	424,839	1,799,705	18.00	0.072625	0.275076	0.718364
5 ~ 9	505,189	1,374,865	20.17	0.046940	0.178507	0.820357
10 ~ 14	250,364	1,069,675	19.90	0.029492	0.136115	0.862859
15 ~ 19	216,029	819,311	17.69	0.029000	0.221109	0.777296
20 ~ 24	167,919	603,282	15.09	0.076729	0.356696	0.641038
25 ~ 29	107,642	435,363	16.11	0.102647	0.362754	0.634317
30 ~ 34	68,279	327,721	20.60	0.066606	0.251902	0.743756
35 ~ 39	50,783	259,442	22.95	0.039153	0.161030	0.833156
40 ~ 44	42,310	208,659	22.54	0.034571	0.150677	0.839734
45 ~ 49	35,529	166,349	21.53	0.031293	0.137804	0.847189
50 ~ 54	30,100	130,819	20.07	0.028696	0.127248	0.850524
55 ~ 59	25,601	100,719	18.19	0.026622	0.118245	0.847355
60 ~ 64	21,693	75,119	15.97	0.024990	0.110608	0.831637
65 ~ 69	18,041	53,426	13.50	0.023810	0.103868	0.797198
70 ~ 74	14,382	35,385	10.97	0.023057	0.098589	0.729688
75 ~ 79	10,494	21,003	8.50	0.023034	0.092978	0.620060
80 ~ 84	6,507	10,508	6.36	0.023748	0.073994	0.616082
85 +	4,009	4,009	4.71	0.040920	0.0	0.0

- 1)  $D_B = 2.5 \times {}_5d_0^d \times (5l_0 - {}_5L_0) / 2.5({}_5d_0^d + {}_5d_0^e)$
- 2)  $E_B = 2.5 \times {}_5d_0^e \times (5l_0 - {}_5L_0) / 2.5({}_5d_0^d + {}_5d_0^e)$
- 3)  $5 \times l_0 = 500000$
- 4)  ${}_5e_B = E_B / (5 \times l_0)$
- 5)  $S_B^e = {}_5L_0 / (5 \times l_0)$

### 3 結 果

年齢別の死亡率と転出率によって構成される「転出表」から表1に示したような様々な指標が得られる。指標は、平均余命など生命表一般に関する指標と、5年後の未転出残存率など将来推計のための指標に分けることができる。

本資料では、未転出余命に関する指標のみを示すことにする。まずはじめに、ある地域の年齢 $x$ 歳の人が、それ以降転出も死亡もせずにあと何年その地域に居住することができるかを示す未転出余命（未転出常住期待年数） $e_{(s)x}$ を、府県別にみてみよう。表2には、男女別に0歳時、15歳時、30歳時および45歳時の未転出余命を示した。

#### (1) 年齢別未転出余命の分布

0歳時の未転出余命は転出表における要約値の1つであり、その長短は年齢別の転出率と死亡率の水準の差を要約して示すものである。出生時の未転出余命の長い府県は、北関東と中部に集中している。他方、未転出余命が短い府県は、北東北、東京、山陰、四国と福岡県以外の九州地域に分布している。未転出余命が最も長い府県は、男女とも愛知県で、その年齢はそれぞれ33.45年と39.28年で、男で30年以上の県は、愛知県と群馬県（30.78年）の2県、女で35年以上の府県は愛知県、群馬県、長野県、静岡県のみであった。反対にその最も短い県は男女とも鹿児島県（男15.75年と女16.68年）である。

義務教育の終了する年齢である15歳時の未転出余命は、15～19歳、20～24歳の就職や進学による県外転出率を反映することになる。そのため15歳時の未転出余命は、0歳時や30歳時の未転出余命に比べて、相対的に短くなっている。15歳時の未転出余命が、男で20年以上の府県は4府県、女で30年以上は1県にすぎない。その中で、最も長い県は、0歳時と同様、男女とも愛知県（26.72年、34.29年）である。一方、余命の短い府県も、0歳時と同様に北東北、山陰、四国、九州（福岡県を除く）に分布している。10年に満たない府県は男で15県、女で3県あり、その最も短い県は、0歳時と同様に鹿児島県（4.88年、6.88年）となっている。15歳時の平均余命の分布は0歳時の分布とほぼ同様であるが、その地域差は拡大している。

30歳以上の転出原因は主に住宅関係と転勤移動であり、年齢別転出率の水準は20歳代に比べて低い。その結果30歳時の未転出余命は、15歳時の水準を上回り、0歳時の水準前後にある。30歳時の未転出余命の長い府県は、男女とも北関東、北陸、東海地域に分布している。反対に短い府県は、0歳時と同様に青森、九州地域といった人口流出地域と大都市中心部の東京都で低い。

45歳以上となると、住宅や転職による移動も少なくなるが、死亡率がしだいに高くなることによって、45歳時の未転出余命は、30歳時よりも若干短くなる。未転出余命の地域分布は、これまでみてきたとほぼ同様な分布を示している。45歳時の未転出余命の最も長い府県は、男女とも沖縄県で男27.38年、女子33.11年となっている。0歳時での未転出余命の長い北関東、中部地域のほか、近畿や山陽地域も相対的に長い府県となっている。

以上要するに、未転出余命の長い地域は、北関東、中部といった大都市圏地域の周辺部に位置している。反対に未転出余命の短い府県は、人口流出地域である。東北北部、山陰、四国、福岡県以外の九州地域と、大都市圏地域の中心である東京都であった。

#### (2) 代表的都県の未転出余命の年齢パターン

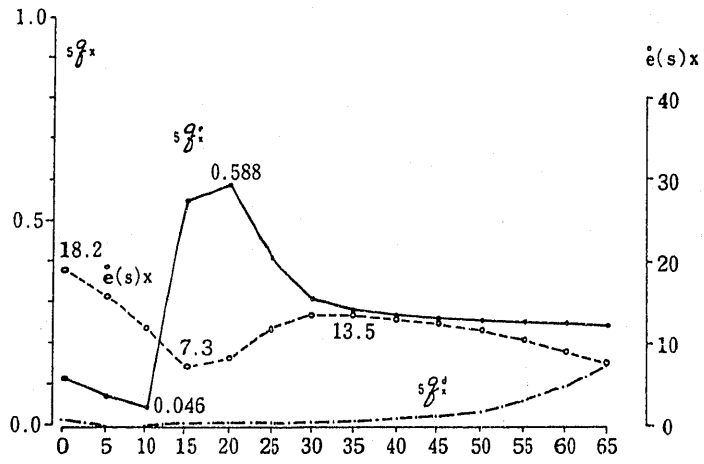
そこで参考までに、未転出平均余命の長い府県から愛知県、反対に短い府県から青森県と鹿児島県および東京都の1都3県について、年齢別に、転出率、死亡率および未転出余命を図に示した。

表 2 府県別，男女年齢別，未転出余命  $e_{(s),x}$

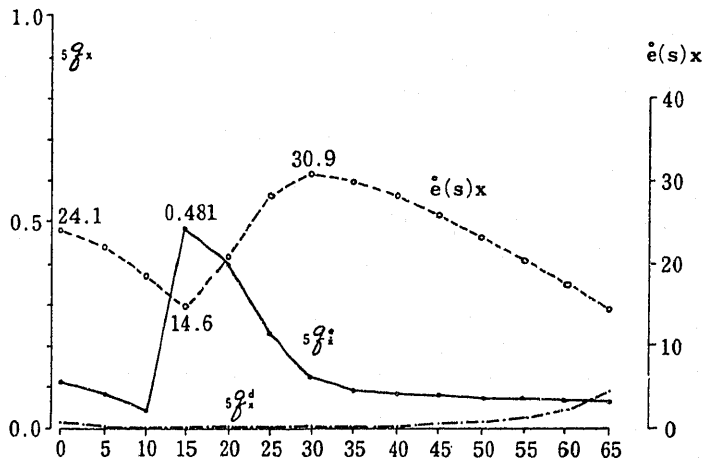
都道府県	0 歳		15 歳		30 歳		45 歳	
	男	女	男	女	男	女	男	女
1 北海道	26.27	33.97	18.19	28.38	28.20	33.55	24.24	28.63
2 青森	18.24	24.05	7.31	14.61	13.43	30.89	12.54	25.75
3 岩手	19.15	23.49	8.23	13.12	19.49	33.84	17.90	28.40
4 宮城	23.98	30.95	15.10	23.48	25.16	35.38	22.80	29.47
5 秋田	20.44	24.41	9.59	14.14	20.56	34.66	18.02	27.62
6 山形	23.76	28.66	12.62	18.33	27.84	36.54	22.81	29.27
7 福島	22.75	26.76	11.67	16.74	26.75	35.31	23.00	28.56
8 茨城	27.82	32.77	17.84	23.06	31.04	37.63	26.35	29.95
9 栃木	28.33	33.14	18.04	23.85	30.76	36.80	26.18	30.65
10 群馬	30.78	37.42	20.36	27.87	32.66	37.74	27.34	31.02
11 埼玉県	25.77	30.07	19.54	25.97	25.88	31.03	24.49	28.42
12 千葉県	24.23	28.37	17.59	23.32	25.44	31.26	24.62	28.77
13 東京都	16.31	18.00	14.31	17.69	14.71	20.60	18.48	21.53
14 神奈川県	23.10	27.82	17.82	25.38	22.15	29.75	22.84	26.68
15 新潟	26.47	30.19	15.60	19.84	30.58	37.48	24.99	29.70
16 富山	27.23	34.67	16.54	26.22	30.17	38.43	24.72	30.43
17 石川	26.66	33.86	17.33	25.60	30.08	36.27	24.89	31.17
18 福井	24.78	31.16	14.39	21.51	31.17	37.79	25.90	30.88
19 山梨	24.17	29.45	12.79	19.37	31.24	35.99	26.37	31.17
20 長野	28.36	35.54	16.61	25.47	34.15	38.79	27.11	30.64
21 岐阜	28.41	34.02	18.91	26.32	31.26	36.65	26.08	29.49
22 静岡県	27.10	36.24	17.98	29.03	30.50	36.29	25.97	31.10
23 愛知県	33.45	39.28	26.72	34.29	30.70	36.16	26.17	30.18
24 三重	24.26	30.70	14.81	23.18	28.26	35.32	24.90	30.56
25 滋賀	28.89	32.03	16.31	23.97	29.75	35.32	25.64	29.01
26 京都府	27.56	32.66	20.61	27.18	27.39	33.76	25.71	28.80
27 大阪府	25.92	30.59	20.84	27.58	24.10	30.10	22.89	27.51
28 兵庫県	24.22	28.69	18.09	24.73	24.37	30.82	23.72	28.36
29 奈良	26.80	29.62	19.37	24.20	26.95	33.16	25.59	28.23
30 和歌山	22.56	27.29	13.86	19.71	26.29	33.10	24.90	29.59
31 鳥取	19.93	25.34	9.43	15.50	27.29	35.82	24.70	29.83
32 島根	18.04	19.61	7.07	8.97	25.49	32.77	22.99	27.46
33 岡山	24.96	30.29	15.89	22.72	29.73	36.30	25.87	30.18
34 広島	24.08	30.76	16.59	25.84	27.77	34.44	25.60	30.54
35 山口	17.95	24.40	8.62	17.05	23.86	31.31	23.61	27.47
36 徳島	19.83	24.87	8.94	15.14	24.77	34.38	22.75	27.35
37 香川県	20.02	27.12	10.46	19.21	27.87	34.14	24.91	29.53
38 愛媛	19.78	24.99	9.26	16.01	25.49	33.65	23.03	28.58
39 高松	19.38	23.98	8.97	14.82	22.73	33.70	21.06	28.30
40 福岡	20.02	25.05	13.00	21.34	21.97	28.86	21.82	27.50
41 佐賀	17.71	21.35	7.82	12.65	23.03	28.25	21.58	25.71
42 長門	15.57	17.76	6.62	9.64	17.72	25.38	18.61	24.59
43 熊本	16.61	20.06	7.04	11.98	18.85	28.05	19.08	27.35
44 大分	16.98	22.10	6.04	13.16	21.41	31.21	20.87	27.28
45 宮崎	16.40	18.57	6.42	9.71	18.28	29.35	18.84	28.04
46 鹿児島	15.57	16.68	4.88	6.88	15.19	28.45	15.66	26.09
47 沖縄	25.00	29.74	11.94	16.84	32.02	43.31	27.38	33.11

図1 転出率、死亡率および未転出余命

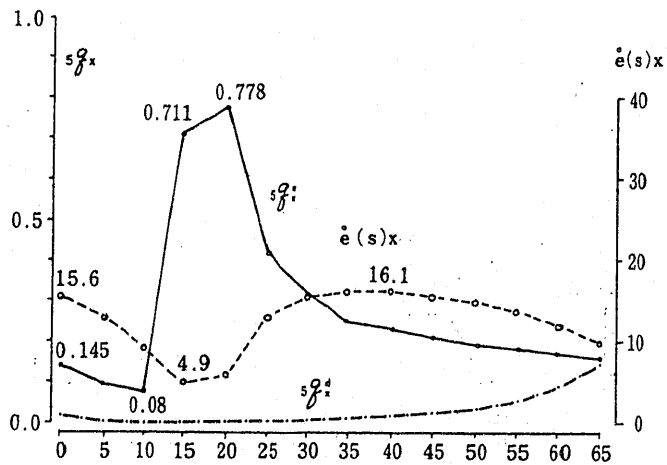
(1) 青森県, 男 (昭和45年)



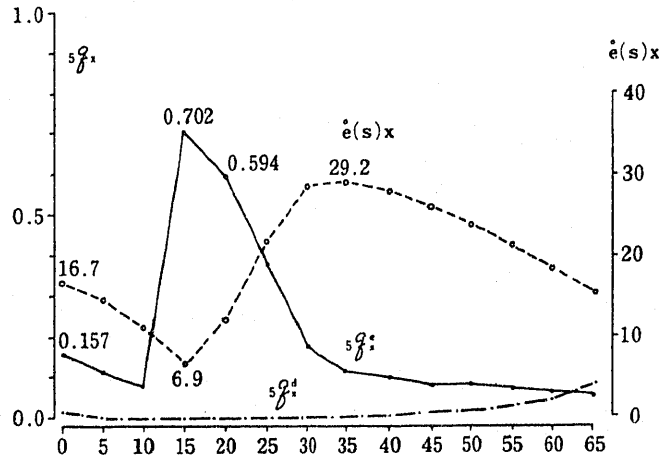
(2) 青森県, 女 (昭和45年)



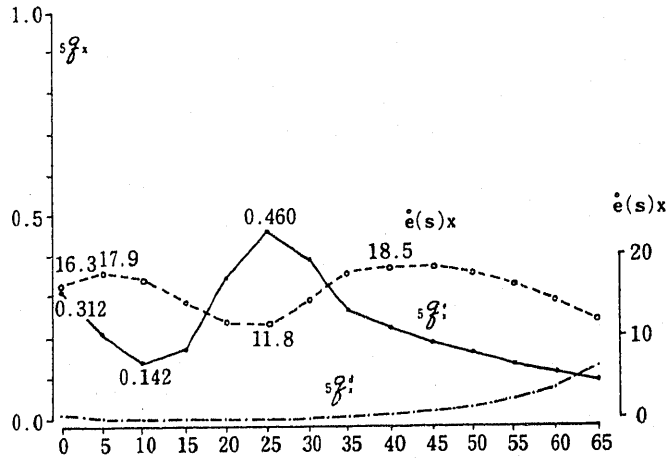
(3) 鹿児島県, 男 (昭和45年)



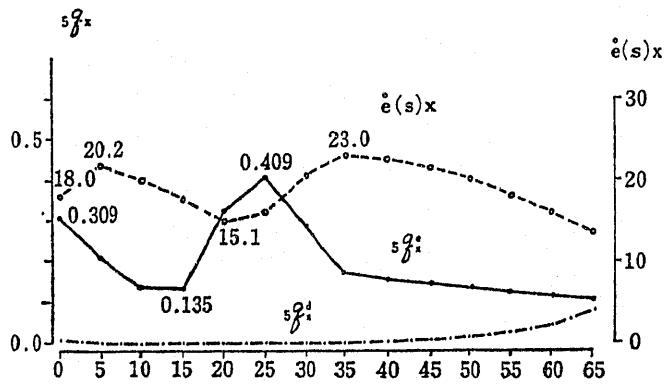
(4) 鹿児島県, 女 (昭和45年)



(5) 東京都, 男 (昭和45年)

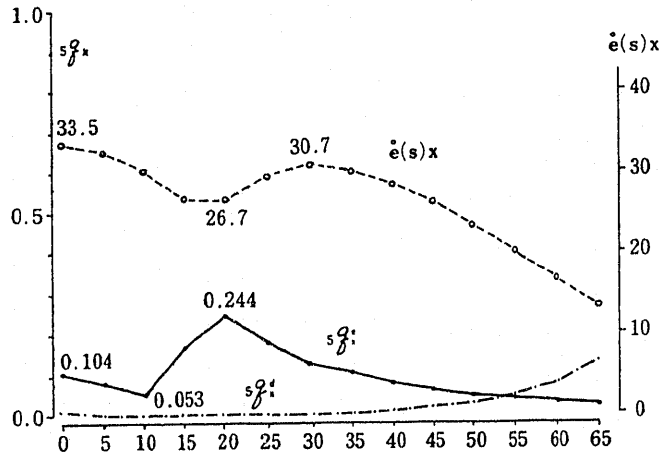


(6) 東京都, 女 (昭和45年)





(7) 愛知県, 男 (昭和45年)



(8) 愛知県, 女 (昭和45年)

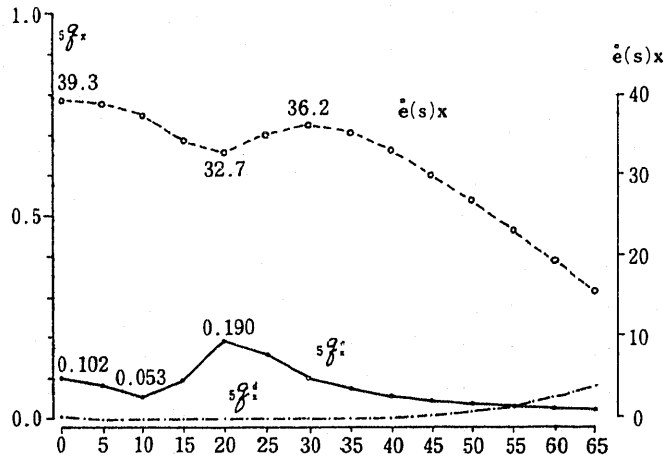


図1(1)~(8)から、次のことが指摘できる。第1に、年齢別の死亡率は、50~60歳まで、移動率よりもきわめて低い水準にある。その結果未転出余命は、死亡率よりも転出率の水準に規定されているといえる。

第2に、15歳未満の年齢別転出率は、年齢が低い程高率である。その水準に男女差はない。しかし、地域差は大きく、東京都の転出率は他地域に比べて高水準である。このことは家族移動が大都市に多いことを示唆している。

第3に、年齢別転出率は、15歳から35歳まで高率を示しているが、そのピーク年齢は府県や男女によって年齢に差がみられる。1都3県の中で、年齢ごとに整理してみると、15歳でピークを示すのは、青森県と鹿児島県の女子、20歳でピークを示すのは青森県と鹿児島県の男子と愛知県の男女、そして25歳時にピークを示しているのは東京都の男女である。

第4に、未転出余命の年齢による水準の変化は、一般に15歳まで低下し、20歳から上昇し、30~35歳でピークとなり、40歳以上となると再び低下を示している。しかし、15歳未満の転出率水準が高い東京都は、0~5歳の転出率が0.3を超えており、0歳時の未転出余命は5歳時のそれより低い水準となっている。